

薬の欠品、供給難の影響大

がん社会 を診る

中川 恵一

ています。

小林製薬製品による健康被害問題でも明らかにりましたが、サプリメントなどの健康食品は安全性のチェックが不十分ですから、私は近づきません。私の場合、医療用医薬品のなかでも、昔から使われているものを服用するようにしています。その代表がこの連載でも紹介した糖尿病薬のメトホルミンです。

カロリー制限に似た作用を持ち、長寿やがん予防などの

効果も期待されています。60年以上も前から使われていたすから、安全性については太鼓判が押せますし、値段も一錠10円程度と安価です。

長く使われ、安全性が担保されている薬ほど安価になります。供給サイドにとってはお荷物になる可能性もあり、欠品の背景になっているのかもしれない。

2023年の国内の医療用医薬品の売り上げトップは小野薬品工業のオプジーボで、売上金額は1662億円。上位10製品のうち、5つががん治療薬でした。

高額ながん治療薬のなかにも供給停止となるものもあります。前立腺がんに使われるカバジタキセル（商品名、ジェブタナ）が現在出荷停止となっています。

罹患（りかん）しますから、影響は甚大です。供給元のサノフィは、製造元での製造の遅れと、需要が想定を超えて推移したことを理由に、「5月下旬頃まで出荷停止が避けられない状態が続く」としています。

承認済みの医療用医薬品が欠品する問題の他、新しいがん治療薬が使えない「ドラッグ・ロス」も深刻です。わが国の薬価抑制政策により、新しい医薬品の承認・販売そのものが困難になってきているのです。

新薬開発には莫大なお金がかかりますが、日本では画期的な新薬でも薬価が低く抑えられるため、海外の製薬会社にとって市場としての魅力が失われつつあります。

欧米で開発された新薬の7割は日本では承認されていません。海外で使用されるがん治療の標準薬が日本では使えないケースが増え始めており、今後が心配です。

（東京大学特任教授）

今年2月に実施された薬に関するアンケートによると、日本人の6割近くが最近1年間で処方箋を必要とする薬を服用したと答えています。当然ですが、年代とともに服用率も上昇しています。私も5年ほど前から、高血圧の薬などを同僚の医師に処方してもらっています。

困るのは、処方箋を薬局に持参しても、薬の欠品が少なくないことです。前述のアンケートでも、薬を必要としている人の2割が薬不足を感じ



イラスト 中村 久美